

〔論説〕

日本的倫理観について

——「ありのまま」と「おのずから」——

佐伯啓思

一

日本人は倫理規範的意識が薄いとしばしばいわれる。もとより共有される倫理規範が存在しない社会などありえないが、その倫理規範を個々人がどこまで自覚的に意識しているかといえば、確かに日本人の倫理意識は弱いともいえよう。少なくとも、西洋のカント的な強い普遍的倫理観やキリスト教をバックにした絶対的倫理観に比するような「強い倫理意識」は日本には存在しない。

そしてそのことは、多くの場合、日本における「個」の自覚、つまり個人主義や責任意識の欠如と重ね合わされてきた。自覚的に選び取られ内面化された倫理観の欠如は、「個」の自覚の欠如と並行しているわけである。それに代わって日本人の倫理観を支配しているものは、他者への同調、集団への帰属、普遍的な「理」よりも場の「情」への傾斜、といったものである。しかもそれは、日本人の精神的特質、もしくは日本文化の根底にある特質だとされる。

とはいえ、倫理観を持たない社会はありえないとすれば、倫理意識の弱いとみられる日本には、日本なりの倫理のあり方が存在するともいえよう。しかも、それは、日本人の精神的特質や日本文化と決して無関係ではない。和辻哲郎が日本の倫理思想を論じるにさいし、古代から近代に至る日本の歴史全般を見渡し、日本の文化および思想の史的記述として論じようとしたのも、そのあたりに起因するのであろう。日本の倫理観を論じることは、ほとんど日本人論、日本文化論を論じることにもなるからである。

この小論は、もちろん、日本の倫理観を包括的に論じるものでもないし、それを日本文化論と厳密に重ね合わせようというものでもない。ただ、日本文化論のある側面と日本の倫理観が交差するひとつの論点に絞って日本の倫理の特質をスケッチしてみたいと思う。

すでに述べたように、われわれは、日本人の倫理意識の薄弱さに関して一定の図式を想定している。近代的な自我意識が弱体な日本では、倫理観が個人の自覚としては自立せず、常に他者や集団、あるいは人間関係に連動して作動する、と先に述べた。それに明確に哲学的な表現を与えようとしたのが、和辻の『倫理学』であり、ここでは、そもそも「倫理」とはすべて具体的な人間関係の場、つまり様々な集団の場にお

いて与えられる、という理解がある。「倫理とは人間共同態の存在根拠にかかわる」という和辻は、この「人間関係としての倫理」のいわば論理構造を哲学的に叙述しようとした。だがこの「論理構造」とは別に、現実的な経験の場に目をやれば、日本人の集団主義的性格、理よりも情を重視する性格、そして、普遍的・超越的基準を措定するよりも、現実的に物事を見るという現実主義こそが、日本人の倫理観（もしくは、倫理意識の弱さ）を形作っているのではないのか。このような理解はかなり一般的に持たれている、とあってよいだろう。

たとえば、中村元は『日本人の思惟方法』において、日本人の精神的特質を「現実主義（与えられた現実の容認）」「集団主義（人間結合組織を重視する傾向）」「非合理主義」の三点において論じているが、これもその良し悪しは別として、多くの人が持っている実感であろう。すると、人々の倫理的判断、つまり善悪判断、行動準則はどうなるのか。その基準はどこからでてくるであろうか。それはこの社会を超えた超越的な命令でもなく、逆に個人の内面における自省の結果でもなく、あくまで他者や集団への同調、現状の追認、他人との情的なつながり、ということになるだろう。そこから、しばしばいわれる、「空気の支配」「同調圧力」「世間体」などという日本の特質がでてくる。善悪に基づく行動基準は、日本の場合、個人の内面が引き受ける責任ではなく、他人志向的な「空気を読む」ことや、「多数への同調」、あるいは「世間への体面」に帰着するというのである。

多くの場合、このような「日本人の精神的特質」は否定的に論じられる。時には、それは前近代的な日本の閉鎖的な共同体（ゲマインシャフト）性を示すもので、近代的自我の誕生以前の段階である、などといわれる。戦後のある時期までは、それはいわゆる近代化論者、進歩派知識人の決まり文句だったといってもよい。

ところが、話はそれほど簡単ではない。なぜなら、それは近代市民社会の形成によって克服できるというような種類の問題ではないからである。ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの移行というような問題でもない。言い換えれば、普遍的な歴史観を掲げる進歩主義の発想で捉えられる問題ではない。問題は、日本の文化的なものの本質、精神的なものの根底にあるからだ。それをどのように理解するかという点にこそこの問題は関わっているのである。